



#### 現代社会における青少年の育成

千葉大学 名誉教授

長島 和子

あと10年で21世紀を迎えるという1990年代に、「パラダイムの変換」をキーワードにしたシンポジウムが開かれたことがあった。その当時はその用語の意味が良く理解できなかったが、その後の社会の変化を目の当たりにして大いに納得している。「パラダイム」とは「共有された一連の仮説、疑う余地のない暗黙の了解」で、青少年の育成に関してもまさにこのパラダイムの変換が起こっていると思われるのである。

今回のモニターアンケートの調査結果からも分かるように、青少年有害環境（有害情報）の主なものは、インターネット上の各種サイト・携帯電話である。これらの媒体は、非常に便利なものであり有用性に富んでいるが、使い方次第では有害環境と化するのである。青少年の育成に関わるのは、家庭・学校・地域である。以前は三世代家族が当たり前であり、社会的規範も強く、大人になるための通過儀礼が存在し、青少年はそれぞれに悩みながらも仲間の力も借りて大人になっていった。

しかし、現代では核家族化し、男女共同参画社会のもとに女性の社会参加が推進され、反面、男性の家庭参加はあまり行われず、家庭の教育機能は低下してきている。一方、情報化社会となって情報が氾濫しており、情報の取捨選択の判断基準も必要である。このような現代社会にあって青少年の育成はどうしたらよいか、そのヒントになるものを次に挙げてみたい。

- ① まず、周囲の大人が、現代社会では、パラダイム変換以前の「暗黙の了解」では青少年の健全育成は望めないことをきちんと意識し、青少年が一人の人間として自立できる能力を身につけられるように手助けをする
- ② リタイアしたシニア世代が、青少年の主体性を尊重しつつ、地域で積極的に青少年育成に関わる
- ③ 情報化社会ではあるが、インターネットによる情報は間接情報であり部分情報である。青少年にはもっと生身の人間に関わる直接情報や全体情報が大切であることを意識して、大人が体験を伝えるようにする
- ④ 青少年に体験を通してものを考えることの重要性を学ばせるために、地域の行事に積極的に参加させるようにする

現代社会における青少年の育成に求められるのは、青少年がよりよい大人に成長できるようなシステムを地域でつくることではないかと思われる。

## 「いろいろな人がいる、みんな違っている」

財団法人 インターネット協会 主幹研究員  
大久保 貴世

えっ？そうだったの！

講演先の高校から会社へ戻り、女の子から届いたメールを読んで、驚いた。

「大久保先生、こんにちは！！今日の講演会にいた高2の生徒です。今日、聞いたお話は、とてもためになりました！！将来の自分、今の自分にとっても役に立つ講演会で勉強になりました^^」

その女の子は、1カ月前にインターネット協会にメールで相談をしてくれた子だった。

### ■ 思春期の悩み、メールで寄せられる

相談内容は、けっこう重いものだった。

相談：中1の頃にSNSで知り合った人とお互いの写メを交換し合ってしまった。住んでいるところや名前も教えたこともあります。今、思うと何で教えちゃったんだろうと、とても後悔しています。また、裸の写メ送ってよと言われて送ってしまったことがあります。悪用されていないか不安です。とてもとても後悔しています。過去のことですが怖いです。

回答：その写真は随分前のものなら、あなただとはわからないと思います。今、悩みながらも我慢さえすれば、「あの時はなぜあんなに悩んだんだろう。」と感じる時期がおとずれ、どんどん気持ちが安定してくるはずです。悩み抜いた後は、驚くほど、すっきりするものです。心配しないで大丈夫！

メールの相談では、自分で言わない限り学校名や名前はわからないので、講演聴講者に相談者がいるなんて知るよしもない。嬉しい半面、私に声をかけてくれればよかったのにと歯がゆい気持ちになった。

## ■ いろいろな人がいる、みんな違っている

ネットから一時離れば、現実の世界でいろいろな人がいることを知って、現実の場で鍛えられ、異性や同性の見る目を現実の場で養っていける。そしてネットの世界に戻った時「ここでの投稿には注意した方がいい」「この男性は優しそうに見えて恐いに違いない」と、ネット上で責任のとれる振る舞いができるようになるもの。いきなりネットデビューするのではなく、その前に現実で体験をしっかり重ねていくべきだろう。

今回の調査の中で、ある2人のモニターの自由意見に惹きつけられた。

「地域の小学生から高校生まで参加した子ども獅子舞で、ちょっと悪ガキが立派になって卒業したのは嬉しかった。異年齢の子ども達が交流することで子どもそれぞれが成長していく（大分の50代男性）。」

「"いつも見ている"ということをやったり、態度で示したりと、安心して、こちらに心を開いてくれるようになった。金髪、ボディピアスで主張していた子が自ら黒髪に染め、ピアスを外して来るようになった（大阪の20代女性）。」

まずは現場で人と人が触れあうことが大切なのだと、全く同感と思った。

## ■ 姉が弟を思いやる

ところで、その女の子からのメールはお礼だけでなく続きがあった。

「相談なのですが、私には来年中1になる弟がいます。携帯電話を持つ頃が近いと思います。姉から、携帯電話を持つ前にネットの使い方を注意したいので簡単にわかりやすく教えられるアドバイスをください。」

自分が失敗した経験から優しさが生まれている。失敗は教訓となったわけだが、出来たらその一度でも失敗はしてほしくはないもの。ネット上に溢れる有害情報を鵜呑みにせず、自分自身をしっかり見据えてほしい。メールでも電話でも、一言かけるだけでも全然違う。「そんな画像みたらびっくりしたでしょう、私だってびっくりしたもの。」「クリックしたら請求なんて、バカみたいな話ないよ。」「カッとなってどんどん過激な書き込みになる、そんなヤツもいるよ、気にするな！」などなど。

またこの女の子にメールで返事しようっと。ふー、よかったよかった、と。



## 調査のむこうにあるもの

インターナショナル コミュニケーション  
インスティテュート 所長  
山内 繁勝

私が現在住んでいる東京の杉並区の路上では、いわゆる青少年に有害と思われる看板やポスターなどを見ることはない。ここに引っ越す前に住んでいた、限りなく東京に近い埼玉県のある町では、駅から自宅まで歩く途中にそのたぐいのものが常に散見され、孟母三遷よろしく、当時、小学生だった息子たちのことも多少は考慮して、引っ越したのだった。二人の息子もそうした看板、ポスターなどは見ていたと思うのだが、幸い、特に問題なく育ってきている（と親は思っている）。

とはいえ、それらは物理的な世界で見えるもの。今回の調査で顕著なのは、有害環境として圧倒的にインターネット上のサイトがあげられている点だ。携帯電話とあるのも一部に迷惑メールとして入るものもあるだろうが、携帯電話を通じたインターネットサイトがその大半なのではなかろうか。

街頭の宣伝広告看板やポスターなどは、そこに設置されてあれば、その前を通る人は誰でもそれを目にすることになるし、テレビは放映されれば直ちに全国の視聴者がオープンで一斉にそれを目にすることになる。であれば、対処つまり除去もしやすい。こうした従来型のメディアと比べインターネットサイトは、そこに含まれている内容が直ちにオープンに誰の目にも入るものではない。したがって、今回の調査でモニターの方々が目にしたのは「たまたま」出会ったものであって、実際にアップされているもののごく一部であつたらうことを考えると、実際にサイト上に存在する有害環境は計り知れないものがある。

最近のNHKの調査では、10代以下の若者の大半は1週間に5分もテレビを観ていないという。テレビ離れが著しく、その分インターネットに傾斜し、ひとりでコンピュータと向かい合っているのが長時間にわたっているという実態から想像すると、空恐ろしくもなる。当初は良き意図を持って創られた発明品も、いったん出来上がると、それが悪用されるということはこれまでもよく見られること。これについてどういう対策を取るべきかは、私はまったくの門外漢なのでとても適切なアドバイスなど出せない。

今回の調査の最後の「国や自治体が取り組むべき有害環境対策のうち効果的だと思う対策」として51%の人が「保護者への指導の強化」を、39%の人が「学校教育の充実」を挙げ、さらに33%の人が「取締りの推進」を挙げていらっしゃる。言い換えると、家庭、学校、行政の責任だとしているわけだ。結局は、こういうところに訴えるということに落ち着くのだろうが、これをもう一歩掘り下げて具体的に何をやるのかと考えると、私などは迷路に入ってしまう。

「保護者への指導の強化」といっても具体的に何をすることになるのだろうか。親に「お子さんがインターネットで悪いものを見ないようによく注意してください」と言ったところで、親にいったい何ができるだろう。PCを使わせないことか。親が子どもに「見るな」と言えば、子どもはますます見たくなるはずだ。PCはあくまで個人的な道具だから、親が常にその傍らにいるわけにもいかない。

また、教師が生徒にそういう指導をしたとしても「はい」と言っただけを守るとも思えないし、実際には、いよいよ火に油を注ぐようによけいに見たいという欲求が働いてしまうのが関の山だ。

では、行政が法律を施行すればどうか。法律の縛りで、技術的にスクリーニングすることにより、ある程度はそういうサイトを減らすこともできるのだろうが、完全な撲滅は土台、無理だろう。

考えてみれば、太古の昔から、人は常に悪しきもの、汚らわしきものとは完全に遮断されるということはなかったのではないか。「清濁併せのむ」とか「水、清ければ魚棲まず」などという言葉もあるように、いかなる聖人君子も「濁」とまったく無関係ではいられない。詰まるところ、それを自分の中でどう仕分けするのかという己の心の問題ではないのか。であれば、そういう仕分けができる心を持った子どもに育てるということではないのか。これはいちばん広い意味での教育の問題である。

好奇心旺盛な青少年という年代を考えると、性を含むさまざまなことに興味や関心を持つこと、それ自体は成長する上でとても自然であり、大切なことなのだろう。ただ、それを自分の心の中で然るべく位置づけ、然るべく仕分けできるような成人に育てることこそが重要なのではないか。そういう教育を、家庭はしているか、学校はしているか、社会はしているか—甚だ心もとなく思わざるを得ない現状である。そういう現状にした、あるいは、それを許してきたのは今まさに高齢期を迎えている自分たち世代の責任であることを想うとき、心が痛む。



